

平成 22 年 3 月 15 日現在

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2005～2008

課題番号：17202010

研究課題名（和文） プロソディーの構造と文法性、文理解に関する総合的研究

研究課題名（英文） Integrated Research on Prosodic Structure, Grammaticality and Sentence Comprehension

研究代表者

窪菌 晴夫 (KUBOZONO HARUO)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：80153328

研究成果の概要：

主に日本語のプロソディー構造を特に統語構造・意味構造・情報構造とのインターフェースという観点から分析し、日本語諸方言におけるアクセントとイントネーションの構造、それらのプロソディー構造と統語構造、意味構造との関係を明らかにした。これらの成果は諸学会、研究会および年度末の公開ワークショップにて発表し、また研究成果報告書（冊子体およびPDF）に報告した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	8,300,000	2,490,000	10,790,000
2006年度	6,400,000	1,920,000	8,320,000
2007年度	7,700,000	2,310,000	10,010,000
2008年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
年度			
総計	27,300,000	8,190,000	35,490,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：プロソディー、文法性、文理解、日本語、韓国語、イントネーション

1. 研究開始当初の背景

言語研究において、音声の研究（音声学・音韻論）と文法（統語論）、意味（意味論、語用論）の研究は自立性を持つ研究とされ、それらを統合しようとする試みは少なかった。とりわけ過去 20-30 年間にわたって言語の研究がより理論的となり、研究分野がさらに細分化されるにつれ、音声—文法—意味という言語研究の 3 つの主要分野が独自の発展を

遂げてきたと言って過言ではない。言語研究者が比較的少なく、研究分野が多岐にわたっている日本においては特にこの傾向が顕著であった。ところが近年、音声の中でもイントネーションを中心とする「プロソディー」の研究が言語研究の各方面から大きな注目を集めており、上記の 3 分野を統合した研究の必要性が認識されはじめている。

まず、統語論、意味論の分野では WH 疑問文や省略(ellipsis)、代名詞削除(pro-drop)など

の現象において、文の文法性判断にプロゾディーが大きく関わっていることが日本語や英語をはじめとする諸言語の研究において指摘されている。特定のイントネーションで発音すれば、これまで非文法的とされてきた文が文法的と判断されるようになったり、逆にこれまで文法的とされた文が別のイントネーションで発音されると非文法的と判断されるようになるという指摘である。言うまでもなく、「文法性の判断」は統語研究、意味研究の根幹に関わる部分であるが、この部分にプロゾディーが大きく関わっているというのである。

同じことが心理言語学の分野でも認識され始めている。人間が文をどのように理解しているかを探る文理解・統語解析の研究において、プロゾディーが重要な役割を果たしているということが J. Fodor をはじめとする欧米の研究者により指摘された。たとえば黙読 (silent reading) で文を読んでいる場合であっても、一定のプロゾディー構造を頭に構築して文の意味を理解しているという実験結果が報告されている。プロゾディーの構造が人間の文理解と大きく関わっているという指摘である。情報構造の研究においても、フォーカス (焦点) が語順などの統語構造だけでなく、イントネーション句形成などのプロゾディー構造とも大きく関わっているということが J. Hirshberg をはじめとする欧米の研究者により指摘されている。

2. 研究の目的

本研究は言語研究における3つの主要分野—音声の研究 (音声学・音韻論) と文法 (統語論)、意味 (意味論、語用論) の研究—を「プロゾディー」 (イントネーションを中心とする文の発音) の研究を軸に統合し、日本語を主対象に行う研究成果を広く世界に発信しようとするものである。とりわけ、「プロゾディーの構造」、「文法性の判断」、「文理解のメカニズム」の3つを主たる研究対象として、これまで多様化してきた言語研究を一つのパラダイムに統合することを試みる。

3. 研究の方法

この研究テーマにとって日本語の研究は潜在的に大きな価値を持っている。たとえば福岡 (博多) 方言では WH 要素のスコープが明示的にイントネーション構造に現れ、鹿児島方言では疑問文が上昇イントネーションではなく下降イントネーションで表される。東京方言の研究価値はこれまでも評価されているが、日本語には上記の研究対象にとって貴重な言語資料・証拠を提供してくれる方言は多い。本研究ではこれらの言語資料をさまざまな視点から分析・考察することにより、「プロゾディーの構造」「文法性の判断」「文

理解のメカニズム」についてこれまでの研究ではできなかった論証が可能となることを示す。

4. 研究成果

- (1) 日本語 (東京方言) の外来語に見られる促音の生起条件を実証的、理論的観点から分析し、和語や漢語に見られる制約と同じ制約を受けていることを解明した。
- (2) 琉球語宮古島池間方言について、現地調査と音声実験に基づいて、その音調体系と音声的実現の規則を提案し、従来の研究を修正した。
- (3) 福岡方言とブサン方言において、統語構造と音調の関係の詳細を明らかにした。また、宮古島池間方言のアクセントについて、新たな発見をした。
- (4) 日本語の Wh 句におけるスコープの曖昧性とイントネーションの関係について、話し手と聞き手の間で異なる振る舞いが見られることを明らかにし、そのしくみを追求した。
- (5) 東京方言の文末詞「よ」のイントネーションについて音声 (知覚) 実験を行い、イントネーションと意味の関係について考察した。また韓国語慶尚道方言の外来語アクセントについて調査を行い、モーラに基づいたアクセント規則を提示した。
- (6) 琉球語宮古方言の池間地区の方言について名詞、動詞のアクセントを調査し、複合語アクセントの規則を提示した。
- (7) 有アクセント語と無アクセント語の違いによって、文処理過程における韻律情報の影響の度合いに違いがあるかを検証した。その結果、アクセントの有無とは関係なく、関係節の始まりを示す情報として韻律情報が機能していることが明らかになった。
- (8) 宮古島池間方言のアクセント体系の研究を行ない、2つのトーンの対立があることを確認した上で、複合語におけるトーン交替現象を明らかにした。
- (9) 日本語の、Wh 句のスコープに関する曖昧性に着目し、この曖昧性を解消するため発話において話者が操作する韻律情報と、また文理解において聞き手が利用する情報を分析し、両者のずれとその理由を指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 72 件)

- ① Kubozono, Haruo (2008) Japanese Accent. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito

- (eds.) *Handbook of Japanese Linguistics*, 165-191. Oxford: Oxford University Press. 査読有
- ② 馬塚れい子 (2008) 「乳幼児の音声知覚と言語獲得」『生体の科学』59 (5): 448-449. 査読有
- ③ 村岡 諭・松浦 年男・坂本 勉 (2008) 「二種類の韻律情報が文の一時的曖昧性の解消に及ぼす影響」『音韻研究』11: 19-26. 査読有
- ④ Imai, Mutsumi and Reiko Mazuka (2007) Revisiting language universals and linguistic relativity: language relative construal of individuation constrained by universal ontology. *Journal of Cognitive Science*, 31: 385-414. 査読有
- ⑤ 近藤公久・神長伸幸・馬塚れい子・林安紀子 (2007) 「黙読時の内的音声化と眼球運動」『認知科学』400-401. 査読有
- ⑥ Kubozono, Haruo (2007) Focus and intonation in Japanese: Does focus trigger pitch reset? In Ishihara, S. (ed.) *Working Papers of the SFB632, Interdisciplinary Studies on Information Structure (ISIS)* 9: 1-27. Potsdam: University Potsdam. 査読有
- ⑦ Mazuka, Reiko (2007) The rhythm prosodic bootstrapping hypothesis of early language acquisition: does it work for learning for all languages? *Journal of the Linguistic Society of Japan* 9, 132: 1-13. 査読有
- ⑧ Takubo, Yukinori (2007) Two types of modal auxiliaries in Japanese: two directionalities in inference. In McGloin, N. et al. (eds.). *Japanese/Korean Linguistics* 15: 440-451. Center for the Study of Language and Information, Stanford. 査読有
- ⑨ Tamaoka, Katsuo, Michiaki Matsumoto, and Tsutomu Sakamoto (2007) Identifying empty subjects by modality information: the case of the Japanese sentence-final particles -yo and -ne. *Journal of East Asian Linguistics* 16: 145-170. 査読有
- ⑩ 郡司隆男 (2007) 「反実仮想と日本語のアスペクト」『日本語学』26-3: 22-32. 明治書院. 査読有
- ⑪ 郡司隆男 (2006) 「日本語の NPI の韻律と意味」*Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 9: 17-30. 査読無
- ⑫ Hirose, Yuki. (2006) Processing of relative clauses in Japanese: Coping with multiple ambiguities. In Mineharu Nakayama, Reiko Mazuka, Yasuhiro Shirai and Ping Li (eds.) *Handbook on East Asian Psycholinguistics*, 264-269. Cambridge University Press. 査読有
- ⑬ 久保智之 (2006) 「福岡方言と朝鮮語釜山方言の疑問詞疑問文の音調」筑紫国語学談話会編『筑紫語学論叢—日本語史と方言—』20-36. 東京: 風間書房. 査読無
- ⑭ Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140-1170. 査読有
- ⑮ Kubozono, Haruo and Misa Fukui (2006) Phonological structure and unaccented nouns in Tokyo and Osaka Japanese. In Timothy J. Vance & Kimberly Jones (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 14, 39-50. Stanford: CSLI Publications & SLI. 査読有
- ⑯ Muraoka, Satoru, Toshio Matsuura and Tsutomu Sakamoto (2006) On the Influence of Prosody in Processing Relative Clauses in Japanese. *Journal of Cognitive Science* 7(2): 115-137. 査読有
- ⑰ Sakamoto, Tsutomu (2006) Processing empty categories in Japanese. In: Mineharu

Nakayama, Reiko Mazuka and Yasuhiro Shirai (eds.) *The Handbook of East Asian Psycholinguistics*. 270-276. Cambridge: Cambridge University Press. 査読有

- ⑱ Hirose, Yuki (2005) Syntax-prosody (mis-)matching in sentence production in the presence and absence of referential context. *Proceedings of the Sixth Tokyo Conference on Psycholinguistics*. 139-164. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing Company. 査読有
- ⑲ Kubo, Tomoyuki (2005) Syntax-phonology interfaces in Busan Korean and Fukuoka Japanese. In Shigeki Kaji (ed.), *Proceedings of 4th International Symposium. Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Historical Development, Tone-syntax Interface, and Descriptive Studies*. 195-209. Tokyo: Institute of Languages and Cultures of Asia and Africa. 査読有
- ⑳ 田窪行則 (2005) 「中国語の否定：否定の scope と焦点」『中国語学』252: 61-71. 日本中国語学会. 査読有

(他 5 2 件)

[学会発表] (計 37 件)

- ① Kubozono, H., Junko Ito, and Armin Mester. Consonant gemination in Japanese loanword phonology. 18th International Congress of Linguists. 2008.7.24. ソウル・高麗大学
- ② Hirose, Yuki. Prosody-scope correlation in Wh-interrogatives: Production and Perception. International Conference on Processing Head-final Structures. 2007.9.20. Rochester Institute of Technology.
- ③ Hirose, Yuki. Production and perception of prosody-scope correlation in Wh-interrogatives. Workshop on Prosody, Syntax and Information III. 2007.9.14. Indiana University
- ④ Kubozono, Haruo. Loanword accent in South Kyungsang Korean: A moraic account. 2007.8.8. Univ. of Saarbrücken

(他 3 3 件)

[図書] (計 7 件)

- ① 久保智之 (forthcoming) 『音韻領域』福岡：九州大学出版会.
- ② 大津由紀雄・窪蘭晴夫 (2008) 『ことばの力を育む』東京：慶應義塾大学出版会. 195ページ.
- ③ Kubozono, Haruo (2008) (編著) *Asymmetries in Phonology: An East-Asian Perspective*. 東京：くろしお出版. 195ページ.
- ④ 窪蘭晴夫 (2008) 『ネーミングの言語学』(言語・文化選書) 東京：開拓社. 176ページ.
- ⑤ Sakamoto, Tsutomu (2007) *Communicating Skills of Intention*. Tokyo: Hituzi Shobo Publishing.
- ⑥ 窪蘭晴夫 (2006) 『アクセントの法則』(岩波科学ライブラリー118) 東京：岩波書店. 126ページ.
- ⑦ Nakayama, Mineharu, Mazuka, Reiko and Shirai, Yasuhiro (eds.) (2006) *Handbook of East-Asian Psycholinguistics: Volume II, Japanese*. Cambridge: Cambridge University Press.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

窪蘭 晴夫 (KUBOZONO HARUO)

神戸大学・大学院人文学研究科・教授

研究者番号：80153328

(2)研究分担者

田窪 行則 (TAKUBO YUKINORI)
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：10154957

郡司 隆男 (GUNJI TAKAO)
神戸松蔭女子学院大学・文学部・教授
研究者番号：10158892

坂本 勉 (SAKAMOTO TSUTOMU)
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：10215650

久保 智之 (KUBO TOMOYUKI)
九州大学・人文科学研究院・教授
研究者番号：00392126

馬塚 れい子 (MAZUKA REIKO)
理化学研究所・脳科学総合研究センター・
チームリーダー
研究者番号：00392126

広瀬 友紀 (HIROSE YUKI)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：50322095

(3)連携研究者

なし